

思考力・判断力・表現力を高める英語指導

紺渡 弘幸

仁愛大学人間学部

English Instruction for Developing Students' Ability to Think, Make Judgements, and Express Themselves

Hiroyuki KONDO

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

According to the revised Course of Study, each school should be committed to enhancing education to enable students to foster students' ability to think, make judgements, and express themselves, which is listed as one of the three elements of academic ability. In order to cultivate the ability of thinking, judgment, and expression in foreign language classes, language activities that convey not only information but also opinions, thoughts, and feelings are required. In this paper, we examine and re-propose an instructional method named "Narrow Learning with a Built-in Core Task" as an effective method for fostering the ability to think, judge, and express and exchanging opinions, thoughts, and feelings.

Keywords : foreign language, students' ability to think, make judgements, and express, instructional method

1. はじめに

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、学校教育が長年にわたってその育成を目指してきた「生きる力」を具体化し、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力に整理し、各教科等の目標や内容についてもこの三つの柱に基づき再整理を図るよう提言がなされ、これを踏まえて、今回の学習指導要領の改訂がなされた。一般的な学校教育の目的は知育・徳育・体育といった視点から捉えられることが多いが、特に知育に関しては知識・スキルの習得と思考力の伸長がその中核であり、これまでの教育において追究されてきたことはあらためて言うまでもない。それにもかかわらず、このたびの改訂で、学力の三要素の 1 つとして「知識・技能」と別に「思考力・判断力・表現力等」を明示したことは、加速度的に変化の度合いを高めている社会に

対応してより良く生きていくためにこの要素がいかに重要であるかということを再確認し、どうしても知識の習得に傾きがちな教育からその重心を移動することを意味している。本稿ではこの「思考力・判断力・表現力等」の要素を取り上げ、これを育成する英語の授業における効果的な指導法を提案する。¹⁾

2. 指導の方向性

「思考力・判断力・表現力等」に関して、改訂された外国語科の学習指導要領（文部科学省，2017a；文部科学省，2017b；文部科学省，2018）に挙げられている学校段階別目標は以下のように示されている。

・小学校（外国語活動）

身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

・小学校（外国語）

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

・中学校

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的话题や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

・高等学校

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的话题や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

これらの目標に示されているように、改訂された学習指導要領で注目すべきは、コミュニケーションにおいて事実情報のみならず、むしろ考えや気持ちの伝達にウエイトが置かれていることである。「思考力・判断力・表現力等」を育成するためには、当然のことながら基本的に授業の中で思考したり、判断したり、また表現したりする機会が保証されなければならない。その学習過程や結果において生み出される意見、考えや気持ちが必然的に取り扱われることになる。

このように、改訂された学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等」を育成する目的のために、情報のやりとりに加えて、考えや気持ちを伝え合うことが求められている。一方、学習に意見、考えや気持ちの伝達を含めることは自然なコミュニケーションを経験することが必要であるという外国語習得の原則からも動機づけられる。英語（外国語）の学習においては、「単語を暗記する」、「構文を覚える」といった表現に示されるように、一般的に言語知識の学習に重点が置かれることが多い。しかしながら、明示的な言語知識の詰め込みのみでは、実際にその目標言語を使え

るようにならないとの反省から、目標言語を使用するコミュニケーション活動（学習指導要領で言うところの言語活動）を学習に取り入れる必要性が強調されるようになった。コミュニケーション活動では、とりわけ対話者間に存在する情報の格差（information gap）に焦点が当てられ、目標言語によるコミュニケーションを通してそれを埋めさせる活動が頻繁に行われてきた。この言語使用の活動でやりとりされたのは事実情報であるが、我々が日常行っているコミュニケーションにおいて伝達されるのは事実情報に限らない。自分の意見、考えや感情の伝達もその大きな部分を占める。つまり、意見、考えや気持ちを取り上げる指導は、学習指導要領が言うところの「思考力・判断力・表現力等」の育成につながると同時に、自然なコミュニケーションを経験させるという言語習得の必要条件でもある。

そうなると問題になるのは、時間的制約の大きい授業の中で言語知識の学習を行い、併せて学習した知識を実際に使用する言語活動を行い、意見、考えや気持ちを取り上げるには、具体的にどのようにすればよいかということである。本稿では実施可能な指導法の一つとして、Core Task を中心とした Narrow Learning (Narrow Learning with a Built-in Core Task, 以下 NLBCT) (紺渡, 2016) を提案する。

3. 意見・考えの表出を要求するタスク

NLBCT にたどり着く前に考えられたのは、通常の中学校や高等学校における英語の授業で容易に実施できる意見・考えの表出を要求するタスクである。英語の授業で意見・考えを扱う意義について、「思考力・判断力・表現力等」を育成する目的と本来のコミュニケーションを経験させる言語学習上の必要性の両面から確認したが、実際の授業においてどれだけ英語で意見・考えがやりとりされているであろうか。現実には学習者に意見・考えを求めてもなかなか答えることができず、授業が思うように進まず焦燥感を感じることはたびたび経験することである。50 分程度の時間的に制限された授業における指導効率を考えると、何もしないままいつまでも学習者の答えを待つことはできない。どのようにすればよりスムーズに意見・考えを表現させることができるのだろうか。

スムーズに意見・考えを答えることができない原因の第1は、そもそも表現すべき意見・考えを学習者が持っていないことである。したがって、いかにその意見・考えを持たせるかが重要である。そのために、まず賛否を問う Agree/Disagree Task (AD Task)、次いで問題解決を求める Problem-Solving Task (PS Task) が考えられた。(詳細については、紺渡 (2014) 及び紺渡 (2015) を参照のこと。) これらのタスクについては以下のような有効性が見られた。

【AD Task】

- ・学生の発話に fluency の向上が見られた。また、活動実施後の発話では、主張の構成が論理的で、その主張内容の成熟度においても向上がうかがえた。
- ・ライティングの fluency についても向上が期待できる結果であった。
- ・作文の評価から質的向上が見られた。
- ・活動についての質問紙による調査では、このタスクに関して、「おもしろかった」、「やりがいを感じた」、「英語で意見・考えを述べること・書くことに慣れてきた」、「Opinion Paragraph の構成に慣れた」、「この活動を継続して行くと、英語で意見・考えを表現する力が向上すると思う」等と回答している学生が多く、動機づけの効果が期待できることに加えて、意見・考えを英語で表現する力の向上が期待できる結果が得られた。

【PS Task】

- ・タスクの作文の総語数は増加する傾向にあり fluency が向上するように思われたが、前半と後半の総語数の平均間に統計的な有意差は見られなかった。
- ・作文の評価に関して、質的向上の点からもこの指導法の有効性がうかがえた。
- ・AD Task 同様、この活動に対して、「おもしろかった」、「やりがいを感じた」と回答している学生が多く、動機づけの効果が期待できる。学習効果については「Problem/Solution Paragraph の構成に慣れた」、「英語で意見・考えを述べることに慣れてきた」、「英語で意見・考えを書くことに慣れてきた」、「スムーズに書けるようになってきた」、「使える語彙や表現が増えた」の各項目についても肯

定的な回答が多かった。「この活動を継続して行くと、英語で意見・考えを表現する力が向上すると思う」との回答も多く見られた。

さらに、意見・考えを引き出す思考モードを分析的に範疇化すれば、問題解決、比較、仮定、選択、嗜好、価値判断、心理・感情、優先順位、提案、主張などのカテゴリーに分類でき、それぞれのカテゴリーに対応して意見・考えを学習者に要求するタスクが考えられる。以下にその例を示す。

(1) Agree/Disagree Task (AD Task)

このタスクはある命題に対して賛成か反対か自分の意見を主張する活動である。

例. 難民の受け入れ

わが国はより多くの難民を受け入れるべきであるという主張に対して、賛成・反対の意見を述べる。

(2) Problem-Solving Task (PS Task)

このタスクはある問題に対して理由を示して有効な解決策を提案する活動である。

例. 現在の世界における飢餓問題

世界が直面している深刻な飢餓問題に対する解決策を提案する。

(3) Comparison Task

このタスクはある特定の観点から複数の項目の比較を行う活動である。

例. アジア諸国における早期英語教育のあり方

中国、韓国、ベトナム、インドネシア、日本の英語教育を比較する

(4) Ordering Task

このタスクは価値判断や優先順位の分析から、根拠を述べて複数の項目の順序づけを行う活動である。

例. 自分に関わるものの重要性

人間関係、財産、地位、名誉、学歴を重要なものから順に並べる

(5) Selection Task

このタスクはある観点に基づいて複数の項目の中からもっとも適合するものを選択する活動である。

例. 自分に最適の職業の選択

医師、弁護士、スポーツ選手、公務員、会社員、俳優等から最適の職業を選択する。

(6) Reasoning Task

このタスクはある仮定に立って論理的に帰結を導く推論を行う活動である。

例. 消費税の増税

もし充実した社会福祉の財源確保のために消費税を20%にしたらどうなるか論じる。

(7) Affective Task

このタスクはある事柄に対する心理や感情を表現する活動である。

例. 心に残る話

自分が読んだ感動的な話について感想を語る。

4. 意見・考えの表出を要求するタスクの実施手順

学習者がスムーズに意見・考えを答えることができない第2の原因は、自分の意見・考えを英語で適切に表現することがしばしば困難であることである。そのために上述したような意見・考えを表出させるタスクの実施にあたってはこの点を考慮した実施手順が必要である。意見・考えを表出させるタスクの実施に際して、以下のような手順が考えられた。(紺渡, 2014; 紺渡, 2015)

(1) 準備 (Preparation)

① Introductory talk

タスクの導入を行うにあたって、テーマについて教師がコメントしたり、質問したりする。学習者は教師の質問に答えたり、学習者同士でテーマについての初発の感想を交換したりする。また、テーマについて関連する事項をリスティングやマッピングでブレインストーミングして、スキーマを活性化する。次に、タスクについて説明し、達成すべきタスクの目標を明確にする。

② Writing a speech memo

意見・考えを表出するスピーチの準備としてメモを書かせる。メモの内容の枠組みはタスクの種類によって異なる可能性があるが、共通しているのは「意見・考えの主張」、「それをサポートする理由や具体例」、そして「結論」の3部構成になっていることである。(付録参照のこと。) また、発表する際にはメモを読むのではなく、相手に話すようにするために、意見・考えを簡潔にキーワードやキーフレーズを用いて書くようにし、せいぜい単文の箇条書き程度にとどめること

とし、スピーチ原稿全文を書かせることはさける。メモはあくまでも主張する意見・考えを論理的に明確にまとめる手段である。

③ Practice

メモを書いたら、意見・考えを発表するリハーサルの機会を設ける。リハーサルでは、1分間あるいは2分間で学習者がメモに基づいて、個々に声に出して意見・考えを話す練習をする。

(2) 意見交換 (Sharing ideas and opinions)

④ Speech in pairs (1回目)

時間を制限してペアでテンポよく意見・考えを交換させる。教師は計時し、1分間あるいは2分間で意見・考えを述べさせる。時間が来たら、途中でであっても話を止めさせ、交替して話させる。

⑤ Reflection (1回目)

意見交換の後、不足していた語彙や表現を辞書で確認させ、うまく伝えられなかった内容の表現方法を振り返らせる。併せて、不必要な情報を変更・削除させたり、必要な情報を追加させたりする。

⑥ Speech in pairs (2回目)

パートナーを組み替えて再び意見交換を行わせる。意見・考えの発表が決められた時間内で完了するように調整させる。

⑦ Reflection (2回目)

1回目同様、適切な言語形式と内容について振り返らせる。

⑧ Speech in pairs (3回目)

もう一度パートナーを組み替えて再び意見交換を行わせる。

⑨ Reflection (3回目)

最後にもう一度繰り返して適切な言語形式と内容について振り返らせる。

⑩ Speech in front of the class

クラス全体で、数名の学習者にそれぞれの意見・考えを述べさせる。

(3) まとめ

⑪ Writing an opinion paragraph

タスクの最後に10分間あるいは15分間で時間を制限して意見・考えを書かせる。これは、ライティングの能力、とりわけ意見・考えを主張するパラグラフ

あるいはエッセイを書く能力を高めるためであるが、併せてスキルの効果的な統合により、このライティングの段階にいたる学習を強化し、ひいてはコミュニケーション能力を育成することをねらいとするものである。

以上述べた①～⑪の手順でタスクを実施する際、時間を制限して行うが、授業の時間的制約に対応して実施し易いという実用的な理由からだけでなく、意見・考えを簡潔に、スピーディにまとめることや分かりやすく表出すること、話したり、書いたりする際の fluency を高めることをねらいとしている。もちろん意図的に時間を十分取って実施する場合は、手順を複数の授業に分割して実施することも可能である。

5. タスクの実施に関わる留意点

意見・考えを表出させるタスクを考案する段階で必要と感じられたことは、意見・考えを主張するためには、その準備段階でしっかりした思考・判断のプロセスが不可欠で、深く思考し判断するための材料としてテーマに関連した情報・データや概念等のスキーマが十分に活用できなければならないということであり、さらに主張を言語化するために、意見・考えを適切に表現するための語彙や表現が十分インプットされなければならないということである。実際にこれらのタスクを実践してみると、タスクの実施手順の最初の Introductory Talk や Writing a speech memo の段階だけでは必要な予備知識や言語形式を確認・提供することや思考・判断させて意見・考えを形成させることは容易ではないことがしばしばあった。特に、当然のことではあるが、学習者にとってなじみの薄いテーマについては困難であった。そこで、意見・考えを表出させるタスクを実施する授業において、まず学習者が意見・考えを持つこととそれを表現する言語形式を準備するという2つの必要条件を満たすために、単一のテーマについて学習を行った上でタスクを行う方法が考えられた。小学校・中学校・高等学校の通常の授業では教科書が使用され、単元毎に題材が設定されているので、教科書を用いた学習を通して、学習者が単元の題材に関する知識や情報を得ることができる。加えて、その題材に関連した語彙や表現も学習できる。したがって、教科書の単元の題材に関連してタスクを設

定できれば、効率的に意見・考えを表出させる際の2つの必要条件を満たすことができると考えられた。

6. Core Task を中心とした Narrow Learning

このように単一のテーマに関連して行われる学習を Narrow Learning²⁾ と呼ぶことにする。また、上で述べた意見・考えの表出を求めるタスクを指導の中核になるタスクという意味で Core Task と呼ぶことにする。ここで提案する指導法は「意見・考えの表出を求めるタスクを組み込んだ Narrow Learning」(Narrow Learning with a Built-in Core Task, 以下 NLBCT) である。NLBCT は単一のテーマについて、核となる意見・考えを求めるタスク (Core Task) を中心に組み込んだ、あらかじめ決められた一連の指導手順で、4技能を有機的に統合して実施する、複合的な学習プロセスである(紺渡, 2016)。

7. NLBCT の指導手順

NLBCT の指導手順は以下の3つの段階に分けられる。

(1) 第1段階：プレタスク・ステージ (Pre-task Stage)

最初の段階は Core Task を実施する準備の段階である。Narrow Learning は1つのテーマを中心にいろいろな活動を有機的に統合して展開する。上述したように Core Task の成否は、テーマに関する知識・情報といった思考・判断する材料が十分あるか、また、意見・考えを伝える語彙や表現といった必要な言語材料が使用可能かによる。この段階では、Narrow Learning のテーマを導入し、その理解度を確認し、必要に応じてそれに関する知識・情報や語彙・表現を提供する。現実的には教科書を用いた指導をし、学習者がその単元の内容に関して必要な知識を得、よく理解した上で、そのテーマに関して思考・判断する指導を行うのが望ましい。³⁾ インプットソースには教科書本文の他に、新聞や雑誌の記事、関係書物、ニュース、ビデオ等、活用できるものは多い。これらの材料を用いて、テーマを導入し、内容に関する知識を提供する。この段階では、テーマに関するスキーマだけでなく、それに関わる語彙や表現も併せて確認したり、インプットした

りしておくことが重要である。そうすることにより、Core Task で自分の意見や考えをより適切にスムーズに表現できる。

(2) 第2段階：コアタスク・ステージ (Core Task Stage)

この段階ではテーマに関して Core Task を設定して思考・判断させ、その結果としての意見・考えを表出させる。

(3) 第3段階：ポストタスク・ステージ (Post-task Stage)

ペアで意見交換し、自分の意見・考えをライティングした後、クラス全体でディスカッションする。Core Task の内容によってはディベートを設定することもできる。何度か reflection による改善を加えながら、自分の意見・考えを表現する経験を繰り返すことにより、Core Task の初めの段階よりもスムーズにクラス全体で多様な意見・考えをやりとりすることが容易になる。議論は内容的・言語的に向上し、より充実したものになることが期待できる。このクラス全体でのディスカッションが流暢さ (fluency) を高め、暗示的言語知識の形成に貢献する可能性がある。また、ペアよりも大きな心理的負荷を感じる集団で発表を経験することは、英語で自分の意見・考えを話す自信にもつながると思われる。

一方、Core Task を終えた段階で、あるいはクラス全体でのディスカッションを終えた段階で行うべきもう1つの重要な指導は、意見・考えのアウトプットに観察される誤りについてフィードバックを与え、明示的言語知識を学習させることである。意見・考えのやりとりにおいて言語形式に注意が向けられると意味内容と形式の対応につながる気づきが促進されるが、問題はその気づきが自然にどれだけ生じるかという点である。それゆえ、学習の効率を考慮して明示的な言語形式に関するフィードバックを行う。明示的な指導には、形式と意味の対応づけだけでなく、必要に応じて語彙の特徴、類義語やコロケーション、構文、文法規則といった言語知識を含める。

8. NLBCT の利点

これまでの研究で得られた結果から NLBCT には

以下のようなメリットが考えられる。

(1) 自然なコミュニケーションの成立

英語をコミュニケーションのツールとして使用するためには、伝達する内容がなければならない。インフォメーション・ギャップ活動などでは、しばしば人工的に設定された事実情報をやりとりすることで目標言語を使用させるが、NLBCT では選択されたテーマに関する情報・知識に基づきながら、学習者自身の意見・考えを伝え合う本当の自然なコミュニケーションが成立する。

(2) 意見・考えのアウトプットによる統語的な処理の促進

NLBCT は意見・考えを表出させる指導に力点が置かれており、聞く・読むインプットによる目標言語形式の意味的処理だけでなく、アウトプットすることにより、統語的処理が要求されるので、言語形式と意味概念のマッピングがより促進される。また、ポストタスク・ステージに明示的な文法規則に関するフィードバックのステップを含めることにより、文法知識の学習がいっそう促され、正確さ (accuracy) の向上が期待される。

(3) 意味的精緻化や自己関連づけ

NLBCT では意見・考えを表出させることにより、言語形式と意味とのマッピングが促進されることに加えて、言語の処理において、L2 の音声や綴りといった形態面の精緻化 (Structural Elaboration) のみならず、より深い処理である意味的精緻化 (Semantic Elaboration) が行われる。また、自分自身の意見・考えの表出は自己スキーマを活性化させる自己関連づけ (Self-Reference) を伴うことから、言語形式の記憶が強化される可能性がある。

(4) スキルの有機的統合

NLBCT では、意見・考えの表出がよりスムーズにできるように、テーマに関する知識とそれに関係する語彙や表現をインプットすることから意見・考えのアウトプットへと指導を進めることで、「聞く・読む・話す・書く」のスキルが無理なく有機的に統合される。母語であれ、第二言語であれ、言語習得のプロセスにおいてインプットからアウトプットへの展開は自然である。

(5) 言語知識の定着や自動化の促進

NLBCT はテーマを 1 つに絞った狭い学習であるので、単一の特定のテーマについて集中的にインプット（聞く・読む）したり、アウトプット（話す・書く）したりすることで、そのテーマに関連する語彙や表現と接触する頻度が飛躍的に高まる。特定の言語形式に焦点を当てた *focused task* や *input flood* などを無理に工夫する必要がない。加えて、意見・考えの表出およびその反復は、既習の言語知識を繰り返し活性化し、使用させる機会を提供するので、定着につながりその手続き化・自動化を促進する。意見・考えを表出するために必要な汎用的な言語形式や談話構造も反復使用を通して強化される。

(6) 豊かなコミュニケーションの生起

事実情報の伝達を必要とするインフォメーション・ギャップ活動では、そのやりとりにおいてしばしば語彙だけの使用や単純なフレーズの反復使用が観察される。一方、NLBCT では、意見・考えを伝えることが求められるので、当然のことながら、語彙やフレーズのみの使用では十分な理解が得られない。また Core Task では主張のサポートが常に求められるので、理由を説明したり、具体例を挙げたりする必要がある。さらに Core Task には推論したり、提案したりするのもあり、多様な言語機能の使用が求められ、豊かなコミュニケーションが生じることになる。

(7) 学習者の発達段階に見合った適切な内容のある活動

英語の学習においては、未知の言語形式を学習する認知的な負荷を軽減するために、内容はどうしても易しくなりがちで、学習者にとって発達段階に対して幼稚な内容が扱われ適切さを欠くことになる。このことは学習の動機づけを低下させる危険性がある。その点、NLBCT では、実際に起きている問題などをトピックとして取り上げ、いろいろな形で学習者の意見・考えの表出が求められるので、学習者の発達段階に対応した適切な学習が行われる。

(8) 英語によるコミュニケーション意欲の向上

自分自身の意見・考えを表現することにより、個人化（*personalization*）が促され、学習者の英語によるコミュニケーション意欲を高める可能性がある。また、

人工的な情報のやりとりではなく、実際自分が考えたこと・思ったことを述べることも伝えようとする意欲につながる。

(9) 言語学習と内容に関する学習の統合

学習者はこの *Narrow Learning* を通して、言語能力を向上させるのと同時に異文化や現代社会における重要なテーマ（トピック）について関連する知識を得、理解を深めることができる。このことは外国語の学習を内容の学習に有機的に結びつける可能性を意味する。いわゆる、*Content and Language Integrated Learning (CLIL)* をゆるやかな形で実施するのに等しく、共通点が多い。また、単なる日常会話と異なり、思考力・判断力・表現力を鍛える言語学習となる。

(10) タイムプレッシャーによる意見・考えをまとめる力の養成

ここで提案した *Narrow Learning* の Core Task は現実的に通常の 50 分の授業で実施可能な手順を用いている。この時間設定には、この指導法の実施し易さだけでなく、時間制限のプレッシャーを与えることにより、意見・考え表出の取り組みへの集中力を高めるとともに、要領よく意見・考えをまとめる力やスムーズにそれを伝える能力を養うことができる。

(11) 実施のし易さ

NLBCT はテーマを替えるだけで決められた手順に従って実施するので、いったんその学習プロセスを理解すれば容易に実施でき、指導者側にも学習者側にも余計な負担をかけず効率的な学習が保証される。加えて、指導・学習状況に応じて、常にすべてのステップを行う必要はなく、柔軟で弾力的な扱いができるので、実用性（*practicality*）の面で優れた指導法であると言える。

9. NLBCT の課題と改善策

NLBCT について再検討し、より細かな情報を加えて説明してきたが、以下のような課題や改善点も考えられる。

(1) 思考力・判断力および英語の習熟度を考慮すること

NLBCT を実践してみて感じるのは、発達段階、特に思考力・判断力のレベルを踏まえた Core Task の

設定の必要性である。Core Task の研究・開発にあたっては、著者自身の大学の授業での実践のみならず、中学校および高等学校でも研究に協力してもらい、Core Task の有効性に関して一定の肯定的な結果が得られたが、⁴⁾ 研究協力校は国立大学の附属中学校と福井県内の学力上位の進学校で全体的に学力が高く、学力レベルや英語の習熟度が異なる学習者を対象とする場合にまったく同じような結果が得られるかどうかはさらなる検証が必要である。

(2) ペアワークにやりとりを取り入れること

Core Task のペアワークでの意見・考えの伝達は、一方が意見・考えを述べ、他方がそれを聞き、話し終わると役割を交替するというものであるが、話し終わった後に、感想を言い合ったり、不明な点について質問したりするようなやりとりがあるとより充実した活動になる。⁵⁾ 時間的な制約があるので、やりとりする感想や質問については、モデルを示すなどしてスムーズに進められるように指導しておくと思われる。

(3) 自己探求のフェーズを組み込むこと

提案した NLBCT の指導プロセスに加えて、テーマ（トピック）について学習者自身に調べさせ、得られた情報や背景知識に自分の意見を加えて発表させるステップをプレタスク・ステージあるいはポストタスク・ステージに組み込むと、より主体的で深い学びにすることができる。また、テーマについての探求や調べた情報についての発表をグループで行うような協働学習も容易に取り入れることができる。

(4) ICT の活用

テーマについての自己探求や発表にあたっては、iPad 等を有効に活用し、効率の良い情報収集や分かりやすい報告を工夫させたり、発表した内容についての意見交換や Core Task の作文についてのピア・フィードバックの機会を設けると「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立が可能になる。

(5) NLBCT のテーマ選択に関する配慮

NLBCT は教科書で学習したテーマを活用して、それについてさらに深め、発展させるように実施するのが望ましいが、そのテーマは学習者の興味・関心やかわりの度合い、発達段階、教育的価値等に配慮して、

慎重に選択する必要がある。選択されるテーマは、英語の授業で取り上げる必要性、テーマ自体の発展性やテーマ間の有機的関連等を考慮し、全体的なまとまりを視野に入れつつ、シラバスの中に計画的に位置づけられるべきである。具体的には、教科書の内容に加えて Sustainable Development Goals (SDGs)、異文化理解等の問題、文学、CLIL の観点による他教科の内容等の活用も検討すべきである。

注

1. この指導法は筆者が「Core Task を中心とした Narrow Learning (Narrow Learning with a Built-in Core Task, 以下 NLBCT)」と名付けたもので、科研費研究成果報告書（紺渡, 2016）で提案し、また、全国英語教育学会第42回埼玉研究大会で発表したものであるが、紺渡（2016）の報告書では説明が十分でない箇所もあり、大会要綱も要旨にとどまっている。本論文を執筆するにあたり、NLBCT についてより詳しく述べるとともに、本指導法の提案以後に気づいた内容に関する新たな進展や課題を踏まえて、さらなる改善を行い、修正を加えて再提案する。
2. Narrow Learning は narrow reading からの類推による著者の造語である。単一のテーマに絞って学習することで、そのテーマに関連した知識や情報を獲得しながら、関連した語彙や表現を学ぶことができる。しかも、内容（意味）と関連付けながら繰り返し限られた語彙や表現を使用することになるので、効率的に学習が促進され言語習得につながることを期待できる。単元学習は題材内容についての知識や情報を学び、理解することがその目的であり、両者はその点で異なっている。
3. 教科書の内容と異なる内容を取り上げる場合は、それに関する学習者のスキーマが意見・考えの形成に十分であるかどうかを確認し、必要ならばスキーマを提供するインプット活動を指導のこの段階で行うことになる。また、関連する語彙や表現も併せて確認したり、インプットしたりしておくことが重要である。
4. 紺渡（2016）参照のこと。
5. 英語の授業においては目標言語での「やりとり（interaction）」が重要であることは、第二言語習得研究からも明らかである。新学習指導要領では4技能をさらに細分し、話すこと（やりとり）と話すこと（発表）を区別し、5領域としている。英語の授業では、「主体的、対話的で深い学び」というアクティブ・ラーニングの観点からもとりわけ「やりとり」が重視されるべきである。

引用文献

- 紺渡弘幸 (2014) . 「英語の授業における意見・考えの表出を求める効果的な指導法」『中部地区英語教育学会紀要』第43号, 201-206.
- 紺渡弘幸 (2015) . 「英語の授業における意見・考えの表出を求める効果的な指導法－問題解決型タスクの効果と課題－」『中部地区英語教育学会紀要』第44号, 163-168.
- 紺渡弘幸 (2016) . 『英語の授業における意見・考えの表出を求める効果的な指導法の研究開発－科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書』
- 文部科学省 (2017a) . 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』開隆堂
- 文部科学省 (2017b) . 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
- 文部科学省 (2018) . 『高等学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂

要 約

改訂された学習指導要領で注目すべきは、「思考力・判断力・表現力等」を育成するためにコミュニケーションにおいて事実情報のみならず、考えや気持ちの伝達が重視されていることである。思考・判断・表現の機会を保証し、情報だけでなく意見・考えや気持ちを伝える言語活動を行うためには考慮すべきいくつかのポイントがある。本論文ではそれらの点を踏まえ、単一のテーマについて、核となる意見・考えを求めるタスクを中心に組み込んだ有効と考えられる指導法の1つを検討し、その課題・改善点を踏まえて再提案した。

付 録

メモの具体例 (Problem-solving Task)

World's hunger crisis

1. PROPOSITION
Today, as many as 783 million people are facing chronic hunger due to conflict, economic shocks, extreme weather, and high fertilizer prices. What can we do to help solve this serious problem? Please suggest an effective measure we should take, and explain specific reasons and examples to support your opinion.
2. YOUR SOLUTION & SUPPORTING IDEAS (REASONS OR EXAMPLES)
<p>Solution</p> <p>Reasons/Examples:</p> <p>1.</p> <p>2.</p>
3. CONCLUSION

